

☒ニセモノ☒が☒ホンモノ☒
ノ☒に変わるとき

似非恋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“ニセモノ”は要らず “ホンモノ”を渴求した者。

“ニセモノ”から “ホンモノ”に変わった瞬間を見た者。

二人が出逢ったとき、再び運命が動き始める。

目次

ワガシヤ	15
ハジマリ	1

ハジマリ

桜が散り、梅雨が過ぎ、もう季節は暦の上でも夏の季節。

俺こと比企谷八幡は大学受験を終え、地元千葉の人気私立大学に進学して、既に数ヶ月が経過していた。実家から通っているが親父から追い出されそうなので必死に抵抗する毎日だ。

大学生生活だが高校と変わらずボツチライフを送っている。周りが変わったところで俺の性格や社交性が変わることはないし変わる気もない。何が言いたいのかと言うと部活やサークルに入る気はサラサラなかったということだ。

「比企谷君。帛紗^{ふくさ}捌き間違ってるわよ」

どうしてこうなったのだろう。

俺は今『茶道部』に入っている。こんな事実を周囲に知られれば腹を抱えて笑うこと間違いない。そんな事になれば軽く死ぬる。耐えられるのは心臓が三つあるバーン様

ぐらいだ。

茶道部に入った経緯は簡単だ。就職を視野に入れた（もちろん働きたくはないのだが）上で、サークルなどの課外活動をしている者は圧倒的有利だ。面接に使えるというのも一つあるのだが何より履歴書に書ける事が大きい。

学生運営委員会という高校でいう生徒会は最初から頭には無かった。だから俺は俺に合うサークルを探していた。読書サークルや文芸部などの比較的人との関わりがないものを。だがそれは夢のまた夢で、中を覗いてみればウェイウェイ勢の集まりだった。文武両道を掲げるこの高校染みた大学で、読書サークルや文芸部は形だけを取り繕うのに最適だったのだろう。ただのリア充の巣窟で飲みサーだった。

そして辿り着いたのが『茶道部』だった。人数は比較的少なく、人との関わりが少ない。それに興味があつたこともある。あるミステリー小説で『雪月花式』のトリックがあり、その舞台も大学だったという事もあり気にはなつていた。

「雑。やり直して」

「・・・うす」

だが現実とは厳しいものだ。

興味本位で入った部活がバリバリの熱血系という展開は良く見る（漫画）。だがまさか『茶道部』がこんなに厳しいとは思わないだろう。入部を決めた少し前の俺を殴りた。上条さんでも呼んで過去の俺の茶道部に対する幻想を壊してもらいたいレベル。

まあ過去の俺に対しての愚痴はここまでにして、そろそろ隣で俺に厳しく作法を教えられていく同輩を紹介しよう。

宮本るり。

身長は140ぐらいだろうか。眼鏡とポニーテールがトレードマークの女の子。眼鏡を外したら美人だと思えるほど顔は整っている、それ故にかなり冷めた性格に見えるが、初心者 of 俺を見てくれていることから面倒見はいいのだろう。あと超が付く程の毒舌。バツサバツサ切っていく。

「二人とも、ひと段落したらこちらにおいて。一服^た点てるから」

「はい、ありがとうございます。比企谷君、基本を綺麗に出来たら行きましょう」

「・・・ああ」

帛紗^{ふくさ}捌きとは茶道における基本中の基本動作の一つだ。

帛紗^{ふくさ}とは茶器を取り扱うときに用いられる布である。お運びの時は点てる時とは違

う古帛紗ふくさという物を使う。

慣れると簡単だと宮本は言うのだが、如何せん俺は不器用な部類に入る。それに帛紗ふくさが新品なので型が付いておらず非常にやりづらい。

帛紗ふくさを捌いて棗なつめを優しく拭き、もう一度帛紗ふくさを捌いて茶杓を清める。そして最後に帛紗ふくさを腰に吊るす。この手順の間、隣の宮本はそれはもう性癖が捻くれた者からしたら御褒美に近いほど冷たい視線を浴びせてくる。だが俺はノーマルなのでただ怖いだけだ。

「ふう・・・」

「まあ及第点かしら。では行きましょう」

宮本の最低合格ラインは取り敢えず乗り越えたらしい。

先輩が一点ずつしてくれるというので宮本と俺は帛紗挟みふくさを持って立礼棚りゆうれいだなの右側へ正座で座る。

帛紗挟みふくさは帛紗ふくさを含めた茶道において必要な小道具を入れてある袋のことだ。その中にはお辞儀をする時や床の間を拝見する時に使う扇子、お菓子を取り分け受け皿にする時に使う懐紙、茶菓子をいただく時に使う菓子切り（黒文字）などが入っている。

「お菓子をどうぞ」

「お先に頂戴いたします」

先輩が運んできてくれた茶菓子は塩大福だ。

先輩の言葉に宮本が返答し、俺に軽く先礼するとお菓子を箸で自身の懐紙に置く。置いた後は懐紙の右上で箸を清め元に戻す。

茶菓子というのはお客が偶数であつても奇数数で入れなくてはならない。今回は宮本と俺だけなのだが三つ入っている。

宮本に習い同じ手順で丁寧に行つていく。箸の取り方、清め方、黒文字で菓子を切り分け一口ずつ戴く。お菓子を戴くだけでかなりの集中力を使う。

食べ終わった頃には先輩はお茶を点て終わつており、宮本が立礼りゆうれい棚だなに取りに行つていた。元の位置に戻るとお先に、と宮本が俺に先礼する。

「お点前頂戴いたします」

宮本は先輩にお辞儀し、左手に茶碗を乗せ右手を添えて、押し戴く。その後は茶碗の

正面を避ける為に二度右に回し静かに戴く。最後は音を鳴らして吸い切る事が良いのだそうだ。

先程と同じく宮本の見よう見まねでお茶を戴く。お菓子の甘みばかりだった口内に熱い抹茶が流れ込む。入った当初はなぜ最初にお菓子を戴くのか分からなかったが最近は何となくわかってきた。お菓子は抹茶の美味さをより引き立たせる物なのだ。

全ての作法が終わり、今日の活動は終わりの運びになった。先輩や宮本は片付けに勤しむ・・・が俺だけは動けなかった。

「はあ、比企谷君。あなたそろそろ正座に慣れなさい」

「いやそうは言ってもだな・・・」

そう長時間正座をしていたせいで足が痺れているのである。茶道部に入って一番辛いのがしびれた後の立ち上がる時だ。チクチクするわ、足の感覚がなくなつて変な歩き方になるわで散々だ。

痺れが取れた時にはもう殆ど片付けの作業は終わっていた。申し訳ない気持ちで一杯なのだが動けないものは動けない。

「じゃあ今日はこれでおしまいね。来週は教免の講座があるから私は来れないの。宮本さんと比企谷君はどうする?」

「私は使わせてもらえるなら少しだけでも慣れておきたいです。ずっと表千家でやってきたものですから」

「あー俺も用事が——」

「比企谷君は用事なんて無いでしょう。一人でやるのもアレだし付き合いなさい」

「・・・はい」

「ハハハ・・・じゃあ戸締まりとかきちんとしてね。宮本さんお願いね?」

「はい。問題ないです。お疲れ様でした」

この会話を最後に解散の運びとなった。先輩はスクールバスなので時間がないらしく走って向かった。残され た俺と宮本は普通のバス停まで歩く。

「比企谷君。来週はお菓子買ってきてもらえるかしら?」

「経費で落ちるんだったか・・・だがどんなのがいいのかわからん」

宮本は俺の言葉に少々思索したようだ。そして思い付いたのか呟く様に疑問を口に

出した。

「比企谷君。あなたはリア充をどう思う？」

「滅ばばいいと思う」

「即答・・・まあいいわ。じゃあ小さい時に結婚を約束した異性が違う異性と付き合ってたらどう思う？あなたは どうする？」

「その問いに何の意味があるか知らんが・・・所詮は子供の頃の口約束だろ。それを自己責任が生じる歳まで想い続け、勝手に希望を抱いて失望する奴が居るのなら呆れる。押し付けがましい渴望心を異性に充てた所で自身の自己満足だからな。それと俺ならどうするという問いについては、そんな経験したことないから知らん」

どうして宮本がそんな事を聞いてきたのかを知る由もないが、おちやらけた雰囲気や許さない声のトーンは否が応にも真面目に答えざるをえなかった。

「そう・・・じゃあ最後の質問。あなたにとって人と人の関係はどう在るべきだと思う？」
「どう・・・か。人との関係の正しい在り方の答えは、一生涯悩み続ける問題なのだと思う。たとえばその関係が『ニセモノ』であったとしても人との関係の一つの形であって

唾棄すべき物として否定はできない。だからと言って「ホンモノ」なんぞ存在するものかどうか分らない。渴望し、渴求し、誰もが陶醉する様な関係がこの世にあるとは思えないからな」

そう結局は何が正しい答えなのか俺も分らない。

高校時代はあるかも分らない「ホンモノ」という一つの像に縋った。あの場所が、大切だと思えたあの関係が、「ホンモノ」だったのなら壊れる事もなかっただろう。だから俺は「ホンモノ」が何なのか未だにわからないのだ。

俺の答えに宮本は足を止め、こちらを見つめる。その瞳は何かに迷っている様に揺れていた。

「あなたならもしかしたら・・・」

「なんだよ」

「いえ忘れて。比企谷君、今から時間はあるかしら？」

「今からは——」

「ないわね。今から和菓子を買に行くわよ。私の知己が働いている店で、数が多くて安上がりだから私も和菓子を買う時はそこで買っているわ」

「助かるが・・・俺には拒否権というものが存在しないの？」

「ごちやごちや言わずに行くわよ」

「はい・・・」

宮本に付いて行く形でその和菓子屋へ向かう。どこか足取りが重いのは気のせいではないだろう。

?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?

「いらっしやいませー！あ、るりさん！」

「こんにちはわ春」

和菓子屋 // おのでら //

宮本に案内されたその店は綺麗な内装に包まれた感じの良い店だった。月並みの言葉で悪いが和テイストの雰囲気は好きだ。うん。

入店した俺たちを出迎えて来てくれたのは天真爛漫という言葉が良く似合う美少女だった。髪を右に流しアホ毛ツンツと立っている。店の制服なのだろうがとても良く似合っていた。

「舞子先輩・・・じゃありませんね。そちらの方は？」

「同じ茶道部の部員よ。ほら挨拶」

「お前は俺の母ちゃんか・・・比企谷八幡だ」

「比企谷さんですね。はい、覚えました！」

この子ええ子や・・・腐った目が洗淨されて綺麗になりそう。

「春、悪いけど小咲呼んでもらえる？話があるから」

「えっと・・・まさかお姉ちゃんを比企谷さんと会わせるんですか？えっとその・・・目がちよっと不安なんですけど」

「オイ、この目はデフォだ」

「だそうよ。比企谷君は目こそ腐っているものの中身は
いるだけだから問題ないわ」

捻くれて

「宮本さん？ フォローになつてませんよ？」

前言撤回。

ただの小悪魔だコイツ。追い討ちを掛けるように宮本も毒吐くし。だが何となくこの子とは同じシンパシーを感じるのはなぜだろう。

宮本に春と呼ばれている少女は不承不承みたいな顔で姉を呼びに行つた。なんかごめんねと思わず謝つてしまうレベルで申し訳ない。悪いのは全て宮本なのに。

「こんにちわ、るりちゃん。えっと・・・そちらの方は？」

「比企谷八幡だ。大学一回生の茶道部の部長」

「あつそういうことなんだ。小野寺小咲です。同い年だね」

店の奥からやつて来たのは濃い目の茶髪で左側のサイドの髪が長い、妹とは真逆のアシンメトリーな髪型が特徴のまたしても美女。

「ちなみに小咲は短期大学の調理・製菓学科よ」

「まあ和菓子屋の娘となると納得だな」

ちなみに俺の通う私立大学は短期大学もあり、調理・製菓学科の他にスポーツ学科もある。多種多様な学部学科があるのも人気の一つだ。

「で、るりちゃん。今日はどうしたの？」

「あ、そうそう。彼に茶道で使う和菓子の種類を教えてあげて。干菓子とか主菓子。季節物とか」

「うん、わかった。比企谷君だよね？今から教えるけど大丈夫？」

「あ、ああ問題ない。メモ取るから少し待ってくれ」

こうして俺は小野寺小咲と出逢った。

彼女と出会ったことで俺の運命が大きく変わることになるとはこの時知る由もない。

ワガシヤ

夏、真つ只中。学期末のテストも終わり、夏休みへ突入していた。

外では蝉が後世へ繋ごうと短い命を燃やしている。この刹那の一瞬间にどれだけの想いが込められているのだろうか。まあ俺は人間だから知る由もないが。

十数年と繰り返した夏であるのに突拍子にそんなことを思ってしまうのは何もすることが無く暇であるからだろう。

本当に暇だ。積んでいた本も消化し終えたし、新しく買いに行こうにも外の陽炎を見る度に行く気が失せる。

母ちゃんや小町から『バイトしたら？』とよく言われるが、しなければならぬほど経済的に困ってないし、月々の小遣いとお年玉で足りているのが現状だ。

兎にも角にも暇なのである。

部活は週二回から週一回へ変わっている。加えて、この夏休みという期間では無断で休んでも何も言われならしい。まあ休んだことないけど。ホントだよ？ハチマンウソツカナイ。

ピロリン、と夏休みに入ってから全く鳴らなかつたスマホが突然音を出して振動した。スパムメールはドメインしているため、知己からの何かである事が判る。

開いてみるとメールではなく、LINEの通知であった。名前には『小咲』と表示されている……小咲？誰？美人局？

『突然追加しちゃつてごめんね！小野寺小咲です！』

謝罪から入ってくる文章は後々大火傷するつて八幡知ってる。見らぬが吉だったのに既読を付けてしまった。

さて、＼おのぞら＼と言えば俺が所属している＼茶道部＼がお得意様になつている和菓子屋の名である。部長がその店の和菓子にハマつたのが理由だが、紹介したのは俺の同輩である宮本だ。その店の看板娘（口コミ）が宮本と旧き仲だと初めて伺つた時に知つた。

そう言えばその小野寺看板娘が小咲と言う名で宮本に呼ばれてた様な気がする。返信に困つていると更にメッセージが送られてきた。

『えつと……和菓子屋＼おのぞら＼で働いている小野寺小咲です。るりちゃんからLI

NEを教えてくださいました』

どうやら予想通りらしい。だが宮本、俺に一言断りを入れるのが筋じゃないんですね？俺にもプライベートがあるんですよ？無いですか。そうですか。ちなみに茶道部のメンバーのLINEは知っている。半強制的に追加された、が正しいが。

それはさておき、なぜ小野寺が俺のLINEを知りたかったのか、という問題が浮上した。いくら考えても答えが出ない。

『それで何か用か？』

『比企谷君、怒ってる？』

『いや別に怒ってない。驚いただけだ。夏休みは誰とも連絡取ってないからな』

取る相手がない、が正しいですけどね！テヘペロ（涙）

まあ剣豪将軍とかいう名前の奴からは毎日の様に迷惑メールの如くメールが送られてきているが通知はOFFにしている。

『はは・・・そうなんだ』

これはちよつと引かれちゃってますね、うん。

その後のスタンプが『気にしないで!』って小野寺さん追い打ち掛けてますからね? 優しさは時に残酷なんですよ?

『それでね、比企谷君に相談があるの』

『相談?』

小野寺の様な美少女から相談とな。あの見る者を幸せにする笑顔の裏にも悩み事はあると言うことだ。まあ人間だから悩み事の一つや二つはあるだろうが。

然しなぜそれを俺に相談するかが判らない。会った回数も両指で足りるし、そもそもあっちからしてみれば時々来るクライアントってだけだ。必要以上の会話もしていない。というかあんな美少女と話せない。

『えつと・・・夏休みの間だけウチでバイトしない?』

『ウチって“おの”で?』

『うん。アルバイトの方が腰痛めちゃって。男手が欲しいところなの』

小野寺の話によるともう直ぐお盆の時期に差し掛かるから猫の手も借りたいレベルで一気に忙しくなるんだと。一刻も早く従業員を確保してお盆までに使えるレベルまでにしないとイケない、と裏事情まで聞かされた。

『どうして俺なんだ？』

『和菓子屋のバイトだから多少は和菓子のことを知っている人が助かるの。私って男友達少ないから・・・』

それで俺に白羽の矢が立ったと。宮本を通じれば俺の連絡先も分かるからってところか。

然し、だ。幾ら美少女の頼みとは言え、働いたら負けだと自負している俺は挺子でも動くつもりは無い。働かざること山の如し。違った、動かざること山の如し。

『いや俺もアレがアレでアレだから・・・バイトは無理だ』

断り方がアレだがアレだから仕方ない。うん、仕方ない。

「お兄ちゃん、ごはーん！」

「んー」

ラブリーエンジェルこと妹の小町から夕飯が出来たといつもの如く呼び出される。

我が母校である総武高校の夏服に白のエプロンを上に纏った姿はいつ見ても眼福である。悪魔には聖水、屁怒紹にはローション、腐った目には小町のエプロン姿、もう本当に浄化される。

『いただきます』

今日の夕飯は冷麺である。薄切りされた卵焼き、キュウリ、ハム。

シンプルであるが暑い夏にはどうしても食べたくなってくる一品だ。そうめんに並んで夏の食卓によく並ぶ料理だ。

「お兄ちゃん」

「ん？どうした？」

「さつきね、中学の時の友達から相談されたんだ」

「男じゃないだろうな？」

「違うよ・・・目が怖いしキモいよお兄ちゃん」

「うぐっ!!」

冗談だと分かっているてもキモイという言葉は男にはよく刺さる。・・・冗談だよね？
小町はというとハアと肩が上下するほど大きく溜息をついている。

「溜息つくくと幸せが逃げるって言うぞ」

「小町はお兄ちゃんの将来を想像して溜息ついたの。お兄ちゃんの代わりに溜息ついてあげたの」

「俺の幸せが逃げてるじゃねえか」

なんてことしてくれるんだこの妹は。

「もういいよ。それでね相談って言うのはアルバイトの相談なの」

「ほーん」

「従業員の一人が腰痛めっちゃって大変なんだって。それで夏の間だけ男手が欲しいっていう相談だったんだ」

「……どこかで聞いた話だなあーどこだったかなあー。それにしても変な偶然もあるもんだなあ（遠い目）。

「で、お兄ちゃん。バイト行ってきて」

「は?..」

何言ってますの?この妹は。

俺の耳が聞き取った通りの情報ならバイトに行けと申したようだが。聞き間違いだよね?

「どうせ暇でしょ?お兄ちゃん」

「ほら、お兄ちゃんアレがアレでアレだから・・・」

「暇じゃなか！ほら国民の三大原則を果たしてきてよ！」

「勤労の義務が言いたいなら国民の三大義務だ」

「あれ？そうだっけ？」

おお妹よ、高校生なつても情けない。というかお兄ちゃんとても不安です。

ちなみに三大原則が国民主権・基本的人権・平和主義で、三大義務が教育の義務・勤労の義務・納税の義務である。

「どつちでもいいの！もう、話をつけているから明日から行つてきてね！」

「小町ちゃん？ほう・れん・そうつて知つてる？」

「ベーコンと炒めたら美味しいやつでしょ！知つてるよ！野菜のこととかどうでもいから明日行つてくること！いい？」

「小町い……………」

お兄ちゃん、自分の将来より小町の将来が不安だよ。社会の常識ぐらい知つておいておくれ……………あと横暴すぎる。

「その子も働いているから。くれぐれも失礼の無いようにね。小町の交友関係にひび入れないでよ。」

「はあ・・・わかったよ」

俺には無い小町の一種の才能を俺の所為で潰すわけにはいかない。まあ・・・結局いつになっても兄という存在は妹に抗えないものである。

「これがバイト先の住所と電話番号ね。頑張つてね、お兄ちゃん♡」
「・・・・・・・・・・・・・・・・おう」

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

翌朝、小町を課外授業へ見送りした後に、指定された持ち物と必要不可欠な物を準備してバイト先へと向かった。

携帯の位置情報サービスを使って歩く。何度も通ったことがある道を歩く。汗というより冷汗がでてくる。

「はあ……………」

小町が指定したバイト先は和菓子屋“おのでら”だった。